

野呂田芳成氏が語る 「まちづくりに賭けた半生」

森井
博

『自転車・バイク・自動車駐車場 パーキングプレス』誌 発行人

野呂田
芳成

株式会社 住宅・都市等総合研究所代表

【プロフィール】

野呂田 芳成 (のろた・ほうせい)
昭和4年(1929年)秋田県能代市生まれ。中央大学法学部卒 昭和28年建設省(現:国土交通省)入省。山形県、茨城県への出向、建設省都市総務課長、大臣官房文書課長を経て、昭和52年参議院議員当選。昭和58年衆議院議員当選以来連続8期。議員歴32年で引退までに農林水産大臣、防衛庁長官等を歴任。平成14年、勲一等旭日大綬章を受章。現在は株式会社 住宅・都市等総合研究所代表、一般社団法人日本自走式駐車場工業会特別顧問を務める

山形の発展に大きく寄与した「山形自動車道」建設を推進

森井 なるほど。山形での三大事業の2番目は何だったのでしょうか。

野呂田 山形はその名のとおり、山岳地帯に覆われ、なおかつ豪雪地帯でもあるため、県庁所在地で内陸部にある山形市と、日本海側の庄内地方を結ぶ陸路の整備が遅れていました。そこで山岳部を縦貫して高速道路をつくらうと提案したのです。しかし雪深い山形に高速道路をつくるなんて、これも酒田港同様に奇想天外な考えであると受け止められました。そうしましたら地元の山形テレビから連絡がありまして、高速道路の建設構想について話してくれませんかと打診があったんです。

森井 マスコミに興味をもったということですか？

野呂田 番組名を聞いたなら「TVけそつと話」というんですね。「けそつと」というのは初耳でどういう意味ですかと聞いたら、山形のことばで「大ぼら吹き」の意味だということなんです(笑)。

森井 地元マスコミにとっても豪雪地帯を貫く高速道路構想は荒唐無稽だったわけですか(笑)。

野呂田 それでも私は「これからの山形の発展のためには山形市と庄内地方を結ぶ高速道路が必要である」と真面目に説いたわけです。

森井 そしてその「けそつと話」は実現したわけですね。

野呂田 そうです。正式名称は「東北横断自動車道酒田線」で通称「山形自動車道」。現在山形県の大動脈となっており、これほど山形の発展に寄与している道路はほかにないと自負しています。

森井 今は山形新幹線も走っていますが、確かに、その前の高速道路なくして山形の経済発展はなかったと思います。三番目の事業を教えてください。

野呂田 最上川水系の寒河江川に建設した寒河江ダムです。本来、ダムの建設計画

一般社団法人日本自走式駐車場工業会の特別顧問・野呂田芳成氏が、同会主催の会合で行うスピーチを聞くと、いつも内容の有益さに感心し、大いに刺激を受ける。自走式駐車場の技術の進歩に精通しているからこそ、近未来のパーキング業界が進むべき道を的確に論じ、さらには日本の政治の方向性、興味深い海外の経済トピックなども伝えてくださる。深く、なおかつ広い視野、見識をお持ちだ。

野呂田氏の訓話の背景にあるのが、建設省(現:国土交通省)時代に培った多様なキャリアだ。各地で港湾、交通インフラの構築や、工業地帯開発、用地買収などに携わり、多くの実績を残された。昭和52年(1987年)には国会議員となり、平成7年に農林水産大臣、平成10年に防衛庁(現:防衛省)長官を歴任するなど国政の舞台でも活躍されたが、本稿ではパーキング業界に縁が深い旧建設省時代の職務に焦点を当てる。野呂田氏の「まちづくりに賭けた半生」は、私たちの仕事に大きな示唆を与えてくれるはずだ。

(対談収録:2017年6月22日)

「建設省から来た若造が山形県をつぶすつもりか!?!」

森井 野呂田先生は建設省時代、若くして山形県庁の課長、茨城県庁の部長職を務められた一方、首都圏整備委員会、近畿圏整備本部でも勤務されていますね。

野呂田 役人時代は「地方創生」と「大都市政策」に交互に取り組んでいました。役所に入って最初に責任者となったのが昭和34年(1959年)、ちょうど30歳の時です。山形県庁の企画担当課長を拝命し、「三大事業」を提案したのです。

森井 どんな事業だったのでしょうか。

野呂田 まずは日本海に面した酒田市の酒田港の開発でした。現在の酒田港、あれは天然のものではなく人工の港なのでございます(笑)。

森井 いえ、それは知りませんでした。

野呂田 山形県の大河は、松尾芭蕉の句

「五月雨をあつめて早し最上川」で知られる最上川のみで、あとは小さな河川ばかりです。最上川が毎日大量の土砂を河口の酒田港に運ぶものだから、港内には5万トン、10万トンレベルの船が入港できる深さがありません。仮に入港させようとするとも毎年莫大な予算を投じて浚渫しなければならなかったのです。

森井 そういえば最上川は日本三大急流のひとつと聞いたことがあります。それだけに多くの土砂を運ぶのでしょね。

野呂田 その状態では近代工業港には成り得ません。そこで、それまで使っていた港を放棄して、人間の力で砂丘に港を掘ろうと提案したのです。

森井 当時それはかなり大胆なプランだったのでしょうか。

野呂田 酒田にコンクリート製品メーカーの前田製管という会社があり、その創業者で山形県議会議長も務められた前田巖さんから「建設省から来た若造が山形県をつぶすつもりか!?!」とお叱りを受けました。

森井 それほどまでにインパクトが大きかった提案だったと。

野呂田 しかし、初代食糧庁長官を務めた後、当時、山形県知事として活躍されていた安孫子藤吉さんが「中央から来た若い課長だが、こんな斬新な提案は初めてだ。私はこのアイデアに賭けてみたい」と議事を説得してくれて、実現にこぎつけました。

森井 反対派が多いなかで、山形県知事に賛同いただけたのは良かったですね。

野呂田 現在、酒田港は5万トンレベル以上の大きな船が入港できる近代工業港となっていますが、ただ、私が提案した案は安孫子知事の後押しがあったにもかかわらず、すぐには実行されませんでした。日の目を見るまでにはそれから10年以上の月日が必要だったのです。私は山形県庁の後、茨城県庁に異動となり、37歳で開発部長を拝命しました。詳しくは後述しますが、その時に私が手がけた鹿島臨海工業地帯の人工港整備の成功を受けて、ようやく山形県も鹿島に続けとばかりに酒田港の工事に着手したのですが、時期を失した感は免れません。



は土木部からあがってくるものであり、それが何故企画部の私から出てくるのか、けしからんと反対されました。特に当時の土木部長さんは寒河江地方のご出身で、あんな所にダムをつくっても、土質が悪く決壊する恐れがあると反対でした。しかし私は寒河江にダムをつくるのは大きな意義があると考えていましたから、諦めなかった。県知事には都度説明をしておりましてし、建設省の開発

課長を務めた方で、後に九州地方建設局長を務められた伊藤剛さんを招いて視察していただいたり、通産省の地質研究所の所長さんにも来ていただいて、いずれからも太鼓判をもらうことができましたし、その都度知事にもお会いしていただきました。そうした過程を経て、土木部ではなく、企画部発案の寒河江ダムが実現することになったのです。

森井 規模はどのくらいなのでしょう。

野呂田 総貯水量は約1億900万トンで県内最大であり、東北はもちろん全国でも有数の規模です。昭和47年に調査が開始され、19年の歳月をかけて平成2年11月に完成しました。

森井 なるほど。ここまでにかがった案件は、いずれも当初は前例がなかったため反対の声があがったものの、さまざまな方の助けや先生のバイタリティによって実現にこぎつけたのですね。

野呂田 はい。様々な仕事に携わることができ、振り返ってみれば山形では愉快な時代を過ごすことができました。

石原裕次郎主演映画のモデルになった 鹿島臨海工業地帯の開発

森井 山形県庁勤務の後に、先ほど少し触れられた茨城県の開発部長になられたわけですか。

野呂田 37歳の時でした。2つの国家的プロジェクトがありまして、ひとつは鹿島臨海工業地帯の建設整備、もうひとつは筑波研究学園都市の建設整備でした。まずは鹿島の話です。当時、茨城県の所得水準は全国水準に比べると8割程度にとどまっており、鹿島地方にいたっては県全体に比べると8割以下で貧しい自治体が集まっていました。当時の県知事、岩上二郎氏は非常に前向きな人で、貧しい鹿島地方の所得水準を上げようと、そこに人工の港と、一大工業地帯をつくらうとしたのです。

森井 そこで山形県酒田港の実績から、野呂田先生が岩上知事に招かれたということですか。

野呂田 はい、強く要請されて出向することになりました。現在、茨城県は地方交付税を不要とする自治体になっておりますので、鹿島臨海工業地帯もその要因になっているのではないかと思います。

森井 鹿島臨海工業地帯といえば、現在は150以上の企業、2万2000人の従業員が働いている、茨城県最大の工業集積地帯だということです。茨城県の成長に大きく寄与したのは間違いありませんね。

野呂田 岩上知事の用地買収のための斬新な発想もこの計画には欠かせませんでした。いわゆる「4割減反6割還元方式」です。これは工業地帯にかかる土地のうち、計画区域内の地権者が4割の土地を提供する代わりに、県が6割分の代替地を地域外に確保し、提供するという鹿島独自の用地買収方法でした。これによって地権者の理解と協力を得られ、用地買収を速やかに進めることができたのです。

森井 その方式は聞いたことがあります。工業だけでなく、農業の存続にも配慮したバランスの取れた手法だと思います。



上／野呂田氏が山形県庁時代に開発を手掛けた酒田港。国際ターミナルとして日本海の主要港のひとつになっている。下左／山形県の大動脈となった山形自動車道。写真は山形蔵王IC付近。下右／寒河江ダムによって出現した人口湖の月山湖は、シンボルモニュメントとして設置された大噴水が有名。噴射高は112mで日本一。世界でも第4位の高さだ

野呂田 また、この時茨城県は県費をあまり使わず誘致した住友金属、三菱油化などの企業に内諾を取り、交渉して集めたお金と国費を基にしたのです。

森井 野呂田先生をはじめとする職員さんたちの粘り強い交渉があったればこそではないでしょうか。ところで、鹿島臨海工業地帯開発に携わった当時の野呂田先生の仕事をモデルにした映画もありませんか。

野呂田 はい、石原プロモーションが製作した、『甦える大地』です。石原裕次郎、渡哲也、三國連太郎、司葉子、志村喬、奈良岡朋子…豪華キャストが投入されました。石原裕次郎をはじめ主要キャストとは酒を酌み交わしたこともありまして。あれも良い思い出ですね。

「あんなのような人なら土地を売っても先祖は納得する」

森井 続いて、茨城でのもうひとつの案件、筑波研究学園都市での仕事について教えてください。

野呂田 はい。筑波の整備、用地買収



『甦える大地』
Blu-ray発売中 ¥4,700(本体)+税
発売・販売元：ポニーキャニオン
製作著作：石原プロモーション
※DVD同時発売中

野呂田氏が尽力した鹿島臨海工業地帯の開発をモデルに映画化された石原裕次郎主演の『甦える大地』。日本の高度成長期の歩みを記録した劇映画シリーズの一作。昭和46年に公開された

は鹿島と並行して進めました。今でこそ、つくばエクスプレスが開通し、民間・公的機関の研究施設や大きなマンション、商業施設などが集積する大都市になりましたが、当時は前例がなく何をモデルにして進めるべきか分からなかったのです。岩上知事に頼んで海外視察も行いましたが、参考になる所はありませんでした。

森井 やはり用地買収は苦勞されたのですよね。

野呂田 ええ。思い出深いのは、地元で10代ほど続いたある旧家との交渉ですね。代々名主を務める名門の家でした。一人息子さんを支那事変で亡くしていて、代々の土地を自分の代で手放すのが先祖に申し訳ないということで、絶対に売らん!と頑なに買収を拒んでいたのです。しかしその土地は、研究学園都市の中心に当たる重要な場所にあったため、我々としては何としても確保したかった。当初は部長代理などが向うで交渉していたのですが、にっちもさっちもいかなかったため「部長さん、お願いします」と頼まれました。それから私は毎朝4時に水戸を車で出発して6時に現地に着いてその家に通ったのです。

森井 どのように交渉されたのですか。

野呂田 先方は老夫婦で、朝早くに起きて家の周りの掃除などをされていました。私は「おはようございます」と声をかけて、息子さんの仏壇にお参りをさせていただくことを15日間続け、その間、一切土地買収の話はしなかったのです。

森井 なるほど。

野呂田 それで16日目にかがったら、テーブルの上に先方が判を押した契約書類が置いてありました。聞けば「部長さん、あんな若いのに功を焦らず、一切土地の話をしなかった。あんなのような人なら土地を売っても先祖は納得してくれるだろうと思ったんだよ」と理由を説明してくださったのです。開発に携わる役人である以前に、ひとりの人間として貴重な体験をさせていただきました。



所管の領域を越えて大都市政策に奔走した建設省本省勤務時代

森井 その後は本省に戻られたのですか。

野呂田 はい、区画整理課で法規係長、都市再開発課、都市計画課、都市総務課でそれぞれ課長を務めました。ここでも一貫して街づくりに携わったわけです。

森井 その時代における思い出深い案件を教えてください。

野呂田 昭和44年頃に問題化した、日本鋼管(現：JFEスチール)の扇島移転問題ですね。京浜工業地帯の一角にあった日本鋼管の工場が、東京湾の広域公害の元凶になってしまっているということで、三重県の伊勢湾への移転計画が立ち上げられたのです。製鉄工場には高炉が必要で、工程で発生する煙を分散させるために高い煙突を建てるのですが、あろうことか煙が伊勢神宮に到達する恐れがあることが分かりました。それはまずいということで日本鋼管は伊勢湾への移転を断念したのです。

森井 その後どうなったのですか。

野呂田 工場や事務所の規制を定めた工場制限法からすれば日本鋼管の扇島工場は法の趣旨に反していたため、私は一貫して反対の立場を取っていました。しかし、当時の橋本運輸大臣、西村建設大臣、神奈川県知事、川崎市市長らと何度も話し合い、説得されました。扇島に工場ができなければ、従業員とその家族も含めて数万人が大

移動をしなければならないことや工場緑化への配慮、有毒物質の飛散を抑制する技術の進歩もあり、最終的には扇島に立地することになったのです。

森井 2020年の東京五輪まで残すところ後3年ですが、先生は1964年の東京五輪の前の都市整備でも仕事をされたそうですね。

野呂田 あの時代はライフライン、建築物、交通網、その他のインフラ整備が喫緊の課題でした。しかし投資整備に当たる法律は区画整理法や都市計画法だけで、所有権、借地権、借家権などの権利が輻輳する大都市の整備には不十分だったのです。そこで、かつて区画整理課の法規係長等を務めた経験から、誰からも要請されていなかったにもかかわらず、区画整理の「立体換地」等のアイデアを活かした「都市再開発要綱」をまとめ、当時の都市総務課で、後に三菱地所副社長を務めた野崎清敏氏に読んでもらったのです。すると「野呂田君、これは面白いから局議にかけてもらえ」といわれ、勇んで提出しました。

森井 野崎氏のお墨付きをもらって、法律として成立する運びに？

野呂田 いえ、そうはなりませんでした。当時、都市局における法律の権威だった二人の大幹部がチェックして「これは憲法29条にある、私有財産権の尊重に反する。憲

法違反になるぞ」とはねつけられ、最後には「君は確か法学部を出たんだっただよね？」と皮肉られる結果に終わったのです。その後私は都市総務課長補佐から茨城県開発部長に転籍しましたが、後に都市再開発法のための「準備室」が創設され、憲法違反だと叱られた箇所は「権利変換」という新しい衣をまとい、法律として日の目を見ることになりました。今から思えば感慨深いものがあります。

森井 野呂田先生に先見の明があったわけですね。

野呂田 所管を越えた仕事といえば、当時の日本開発銀行（現：日本政策投資銀行）総裁の平田敬一郎氏を思い出します。平田総裁は鹿島や筑波を視察されたこともあり、私に目をかけてくださったんですね。総裁は、鉄鋼、石炭などの重厚長大産業から、再開発、流通業務市街地、ホテル、観光、駐車場など、いわば軽薄短小の分野、ソフトへ融資の重点を移していく必要があると考え、都市再開発課長になっていた私に、開銀の吉田監事を通していろいろな相談を寄せられました。私も重厚長大からの転換はこれからの都市整備に必要な核になると考え、懸命に取り組んだのです。するとある幹部から「補助金を司る官庁にしながら、融資業務に力を入れるのはいかなもの

か」などと皮肉られたことがありました。今ではこれも懐かしい思い出です。

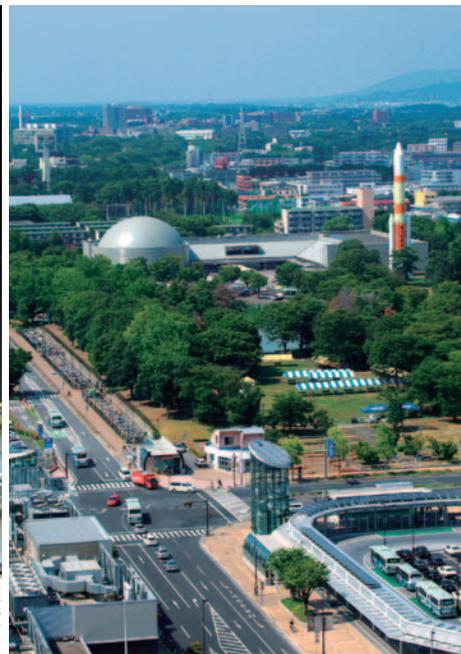
実現迫る自動運転技術 空飛ぶ自動車・自転車への 対応も視野に入れるべき

森井 駐車場に関してはいかがですか。

野呂田 都市総務課課長補佐の頃、サイカパーキングの前会長である稲垣信一郎氏、広研社の渡部功氏、そして森井さんと三人の熱心な駐車場、駐輪場の先駆者との出会いがありました。皆さん、世がモータリゼーション全盛の風潮にあるなか、いち早く駐車場・駐輪場問題に着目された、誠に先見性のあるプランナーであったと思います。そういえば当時、駐車場不足に悩むフランスから視察団が来日しました。彼らは渋滞で車が動かなくなっている首都高速を見て「東京には市街地の真ん中の空に駐車場があるのですか？」と聞いてきましたね（笑）。

森井 事情を知らない第三者の視点にはそう映ったかもしれませんがね。

野呂田 その後、私は日本自走式駐車場工業会の特別顧問となり、工業会からの要望を実現に導く支援をしております。東日本大震災で証明された耐震性の高さを広く



左／野呂田氏が茨城県庁時代に推進した国家的プロジェクト、鹿島臨海工業地帯。ライトアップされた幻想的な夜景も楽しめる 右／今では日本国内最大の学術都市となった筑波研究学園都市。日本百名山の筑波山も近く、茨城県の主要な観光地のひとつでもある

アピールして、普及促進、発展させていく一助になればと考えています。

森井 これからの駐輪場についてはどんな見解をお持ちでしょう。

野呂田 内閣府の「駅周辺における放置自転車等の実態調査」によれば、まだ不足していると言っていると思います。例えば公園や学校の校庭など公共施設の地下を活用するのもひとつの手ですね。公共施設の地下活用といえば、都市計画課長時代、公園課長が嫌がるのを抑えて、所管違いの私が新宿中央公園地下において、東京電力の変電所建設を認めたことがありました。これは主に新宿西口のビル群の電力供給源として使われています。空間の有効活用として評価されており、駐車場、駐輪場も同様に地下活用を推進しているのではないかと思います。

森井 地下を活用して自動車や自転車、自動二輪を停める技術はどんどん進歩していて、機械式地下駐車場、駐輪場が開発され、一部の自治体が公園や駅前の地下空間に導入しています。昭和50年代半ばに100万台近かった放置自転車は、現在、10万



話をうかがっていた時間は計40分程。30年以上前の案件ばかりにもかかわらず、当時関わった人物の名前、役職、プロジェクト名などのキーワードが淀みなく出てくるのには脱帽だった

台未満まで削減されましたが、まだ確かに不足を指摘する声も少なくありません。地下空間を活用する駐輪は、業界としても期待する分野ですね。

野呂田 それと自動運転技術が飛躍的に進歩して、近未来に実現することが見込まれていますよね。駐車場も対応を迫られるでしょうし、さらに年月が経てば、空も飛べる自動車、自転車の登場も予想されていま

すから、これもいまから対応を考えておくべきではないでしょうか。

森井 ドローンによる宅配実験も進んでいますし、おっしゃるとおり空飛ぶ自動車、自転車も視野に入れておく必要がありますね。本日は非常に刺激を受けるお話をお聞きすることができまして、今後のモチベーション向上につながりそうです。今後ともよろしくお願い致します。 **PP**

【パーキングプレス 発行人】 **森井 博** のプロフィール

- 一般社団法人 日本パーキングビジネス協会 理事長
- 一般社団法人 自転車駐車場工業会 会長
- 一般社団法人 日本シェアサイクル協会 専務理事
- 東京八重洲ライオンズクラブ 会員
- 六本木男性合唱団 団員
- サイカパーキング(株)、日本駐車場救急サービス(株)、モーリスコーポレーション(株) 夫々代表取締役CEO

【略歴】 1938年(昭和13年)宮崎県延岡市生れ78歳。
1957年(昭和32年)石川県立金沢泉ヶ丘高校卒
1961年(昭和36年)東京商船大学(現東京海洋大学)卒
1961~1979年 石川島播磨重工業(現:IHI)
1979~1991年 東芝
1991年~ 現職

【趣味】 現在: ゴルフ・車・自転車・歌・仕事
過去: 水泳・野球・陸上競技・テニス

【遍歴】 ゴルフ: 毎週1回ホームコースでラウンド、週1~2回練習場通い。
車: 毎日通勤で運転。中古車3台を大切に乗り廻す。
自転車: マツダレベル、プリチストンモートルン、プロンプトン他数台保有するも年齢を考え余り乗らない。
歌: 六本木男性合唱団でロクに楽譜も読めないのに毎週練習に励む。
仕事: 健康のため平日は毎日9:00~17:00出勤、社員に迷惑をかけている。但し、土、日、祝日は絶対に出社しない。
水泳: 漁港で漁師の子供達と一緒に育ったため、小学校に入る前から泳ぎは得意。ちなみに小学校の名前は延岡市立港小学校。
野球: 中学生までは本気でプロになるつもりであった。元西鉄ライオンズ 故・稲尾和久投手、完全試合投手 田中勉、元巨人 淡河弘捕手は友人。元巨人監督 原辰徳氏の父 故・貢氏も友人でボクサー犬を買った仲。
陸上競技: 高校時代 短距離、やり投げ、インターハイ2回出場。東京陸協元会長でオリンピック3回出場の大串氏とは友人
テニス: 元テテ選手 本井満氏のコーチでかなりの腕前(?)になるも、45歳時アキレス腱断裂でプレー終了。

過去の対談ゲストの方は、WEBでご紹介しています

パーキングプレス 対談 で検索

または <http://www.parkingpress.jp/taidan/> にアクセス

対談記事のバックナンバーもご覧いただけます。

